存在証明の民主化

SoulCarrier の理念と思想的背景

3分で分かる要約

【問題】人類の歴史において、「記憶される権利」は常に不平等だった。王族、宗教指導者、富裕層は永遠に記憶されるが、時間の経過とともに記録が途絶える人も多い。現代でも、無縁仏・墓じまい・管理放棄により、記憶が失われるケースは増え続けている。

【発見】マウイ島の日系墓地で「無名氏」と刻まれた墓石を目にした。名前も、物語も、すべてが失われた人々。これは過去だけの問題ではない——今も、継承者の不在や経済的理由で、人々の記録が途絶え続けている。

【解決策】「存在証明の民主化」——すべての人が、平等に、自分の存在を記録し継承する権利を持つ世界を作る。現代の技術（石英ガラス、ブロックチェーン、AI等）を使えば、それは可能になった。

【活動】SoulCarrierは、忘れられかけた人々の御遺骨を故郷へ届ける活動から始めている。第1号案件「Martin Case」では、日系アメリカ人の母親の遺灰を群馬県の親族へ届けるべく調査中。

【参加】正会員（年三千円）、終身会員（九万円）、賛助会員（一口一万五千円）。あなた自身も、いつか「無名氏」になる可能性がある。最初の一歩を、一緒に踏み出してほしい。

【原点】Pearl（2007-2025）——18年間家族だったトイプードルの彼は、晩年声を失った。元気に鳴いていた頃を残したくて、喉仏を娘が拾った四葉のクローバーと花びらと共にはまぐりの貝殻に封入。どこへでも連れていける「移動できるお墓」を作った。ここから音声QR技術が生まれ、技術研究部門「Pearl Memorial」が誕生した。彼と一緒にマウイ島の墓地を巡り、「無名氏」の墓石を調査した旅が、SoulCarrier設立のきっかけとなった。現在、Pearlの移動可能なお墓はマウイ島に残り、平和の願いと共に時を刻んでいる。

はじめに

本文書は、SoulCarrier（ソウルキャリア）の活動の根底にある思想を体系的に整理したものである。

私たちは「御遺骨を届ける」という具体的な活動を行っているが、その背後には、人類が長らく問うてこなかった根源的な問いがある。

> **「なぜ、一部の人だけが永遠に記憶され、大多数の人は忘れられるのか？」**

この問いに対する私たちの答えが、「存在証明の民主化」である。

第1章　問題の発見——「無名氏」という現実

1-1. マウイ島での原体験

SoulCarrierの活動は、マウイ島の日系墓地で「無名氏」と刻まれた墓石を目にしたことから始まった。

かつて日本から海を渡り、異国の地で懸命に働き、生涯を終えた人々。しかし、その多くは名前すら残っていない。墓石には「無名氏」——名前のない人、という意味の文字だけが刻まれている。

この人にも、名前があったはずだ。家族がいたはずだ。故郷があったはずだ。喜びも悲しみも、人生があったはずだ。

しかし、時間が経つにつれて、その記録は失われ、最終的には「無名氏」という匿名の存在に還元されてしまう。

1-2. 「無名氏」は選択ではない

重要なのは、これらの人々が自ら「無名になること」を選んだわけではない、という点である。彼らは：

- 記録を残す余裕がなかった（移民労働者として生きることに精一杯だった）
- 記録を残しても、それを継承する人がいなかった
- そもそも、社会のシステムが「普通の人」の記録を残すようにできていなかった

「自分の存在を残す」という発想自体が、かつては贅沢だった。それは一部の特権階級にのみ許された行為だった。

1-3. 「無名氏」は過去の問題ではない

これは過去の移民だけの問題ではない。現代においても：

- 孤独死した人の記録は誰が残すのか
- 身寄りのない人の人生は誰が記憶するのか
- 戦争や災害で亡くなった無数の人々の名前は残っているのか

世界中で、毎日、人々が「無名氏」になり続けている。

第2章　構造的問題——記憶の不平等

2-1. 誰が「記憶される権利」を持っているのか

人類の歴史を振り返ると、「記憶される権利」は常に不平等に分配されてきた。

【記憶される人々】王族、貴族、皇帝、宗教的指導者、政治的指導者、富裕層、歴史に名を残した「偉人」

【忘れられる人々】農民、労働者、職人、移民、難民、女性、子孫を残せなかった人々、貧困層

この不平等は、数千年にわたって「当たり前」として受け入れられてきた。

2-2. 記憶を担ってきた存在——その構造的限界

誰が記憶の継承を担ってきたのか。これは批判ではなく、構造の分析である。それぞれの存在は、その時代の制約の中で、できる限りのことをしてきた。

【宗教】魂の救済と記憶の継承を担ってきた。しかし技術的・経済的制約により、すべての人を記録することは不可能だった。

【神道】神社・氏子制度を通じて記憶を継承してきた。しかし特定の地域・氏族に限られていた。

【国家】戸籍制度で国民を記録してきた。しかしそれは管理目的であり、存在証明のためではなかった。

【資本】墓石・葬儀を通じて記憶を残す手段を提供してきた。しかし経済力による格差が生まれた。

重要なのは：これは「誰かが悪い」という話ではない。構造の問題である。技術が発達した現代、その構造を変えることが初めて可能になった。

2-3. なぜこの問題は問われてこなかったのか

驚くべきことに、「記憶される権利の不平等」は、ほとんど社会問題として認識されてこなかった。

【哲学】「死」「記憶」「存在」について深く論じてきたが、「記憶される権利の不平等」を正面から問うことはなかった。

【人権】生きている人の権利は詳細に定義されてきたが、「記憶される権利」は人権として定義されていない。

【テクノロジー】データを永続化する技術は発達したが、それは主に広告やマーケティングのためであり、個人の存在証明のためではない。

なぜ問われてこなかったのか。あまりに当たり前だったから。問うと都合が悪い人が多すぎたから。技術的に解決不可能だったから。

2-4. なぜこの問題は提起されにくかったのか

この問題に気づいていた人はいたかもしれない。しかし、声を上げることが難しい構造があった。これは「誰かを責める」話ではなく、構造を理解するための分析である。

【発信者】影響力は「注目される」ことで成り立つ。「全員が平等に記憶される」という主張は、言いにくかった。

【メディア】「誰を報道するか」を選ぶことが仕事である。「全員を報道すべき」という主張は、取り上げにくかった。

【学者】学問は「重要な思想」を選別し継承する営みである。「すべての人の記録が等しく重要」という主張は、論じにくかった。

【宗教者】長い歴史の中で、魂の救済と記憶の継承を担ってきた。その制約の中で、できることをしてきた。

それぞれの立場から見れば、自然なことだった。しかし結果として、この問題は社会の議題に上がらず、沈黙の中に置かれてきた。だからこそ、「無名氏」の側から出発した私たちが、この問いを立てることができる。

2-5. 草の根から始める必然性

この構造を理解すると、「草の根から始める」ことの意味が見えてくる。

既存のシステム（行政、メディア、学術機関など）は、それぞれの役割と制約の中で動いている。「すべての人の存在証明を残す」という発想は、既存の枠組みには収まりにくい。

【SoulCarrierが主張できる理由】私たちは「無名氏」の側から出発している。マウイ島で「無名氏」と刻まれた墓石を見たことから始まった。記憶を担う側ではなく、記憶から排除された側に立っている。

【草の根運動としての戦略】①一人ずつ救う　②共感の連鎖　③概念の浸透　④臨界点への到達　⑤構造の転換——時間がかかる道のりである。しかし、この道しかない。

第3章　技術的可能性——今だからこそできること

3-1. 永続化技術の発達

現代において、記録を永続化する技術は飛躍的に発達している。

・石英ガラス（5D光学記録）：数億年の耐久性、高温・放射線・物理的衝撃に耐える
・レーザー刻印×金属蒸着（石英ガラス）：5D光学記録よりアクセスしやすく、既存技術の応用で実現可能、特殊な読み取り装置不要
・デジタルアーカイブ：クラウドストレージ、AIによる自動バックアップ、分散型ネットワーク
・ブロックチェーン：改竄不可能、中央管理者不要、永続的なタイムスタンプ
・DNA記録：極めて高密度の情報保存、適切な条件下で数万年の保存が可能

3-2. 技術はあるが、使われていない

これらの技術は存在する。しかし、「すべての人の存在証明を残す」という目的には使われていない。技術は存在するが、意志がない。「すべての人の存在を記録する」という意志を持った人々が現れなければ、技術は別の目的に使われ続ける。

3-3. AIとの関係——アンチテーゼとしての存在証明

【AIの本質】大量のデータから「平均」や「パターン」を抽出する。個人の声は統計的ノイズとして処理される。人間を「データポイント」として扱う傾向がある。

【存在証明の民主化の本質】一人ひとりの名前と物語を残す。「誰だったか」を取り戻す。平均化・匿名化への抵抗。すべての人間を「唯一無二の存在」として扱う。

AIの処理能力を「平均化」ではなく「個の記録」に使う。AIを「無名氏を生む側」ではなく「無名氏を救う側」に使う。これがSoulCarrierの技術的ビジョンである。

3-4. 民主化可能な永続化技術——レーザー刻印×QR×AI

存在証明の民主化において最も重要なのは、「誰でも使える技術」であること。高度な専門機器や莫大な費用が必要では、特権的な記録手段になってしまう。ここで注目すべきが、レーザー刻印機×石英ガラス×QR技術×AIの組み合わせである。

【技術の組み合わせ】

・石英ガラス×金属蒸着刻印：レーザー刻印機で石英ガラスに金属を蒸着させる。特殊な研究設備がなくても実現可能。コストも5D光学記録より大幅に低い。
・QR技術による大容量記録：QRコードにより、文字・画像・音声・動画を圧縮して記録できる。音声対応も検証済み——故人の声を永続的に残せる。デモ公開中（voice-memorial-qr.onrender.com）。クラウドに依存しない物理媒体で完結。
・AIアップスケールによる時を超えた再現：低解像度で記録された画像もAIで高品質に復元可能（実証済み）。むしろ解像度を落としてQR化を推奨——容量を抑えつつ将来のAIで復元。「今の技術」で記録し「未来の技術」で再生する。

【実証1】左：QR化した低解像度画像　中央：QRから復元　右：AIでアップスケール復元

【実証2】石英ガラス×音声QR

【実証3】枯葉への刻印

【なぜこれが「民主化」なのか】レーザー刻印機は既に広く普及。石英ガラスは入手不可能ではない。QRコード生成は誰でもできる。AIアップスケールは無料ツールも多数。つまり、特別な権力や財力がなくても、永続的な存在証明を作れる。これが「民主化」の本質である。

【SoulCarrierの技術的展望】この技術スタックを標準化し誰でも使えるようにする。存在証明キットの開発。寺院・宗教施設との連携による設置場所の確保。オープンソースとしてノウハウを公開し、世界中で複製可能に。

【既に公開済みのリソース】

・GitHub：github.com/timeless-residents — 技術リポジトリを公開中
・Zenn.dev：zenn.dev/idev — 60冊以上の技術書を公開済み
・デモサイト：voice-memorial-qr.onrender.com — 音声QR生成を体験可能

「民主化」は言葉だけではない。技術・ノウハウ・ソースコードをすべて公開し、誰でもアクセスできる状態にしている。

【社会的反響】この技術に関するX（旧Twitter）投稿は、31万インプレッションを獲得。「AIによる復元を前提とした圧縮」という革新的アプローチに多くの関心が寄せられている。落ち葉や枯れ葉といった自然素材へのQR刻印も実証済み。クラウド非依存・維持費不要・災害耐性に優れた新しいデータストレージとして注目されている。

【研究開発への投資】代表の佐藤卓也は、Pearl Memorial（技術研究部門）での素材検証・墓石調査・造形技術開発に、SoulCarrier設立以前から2,000万円以上の私財を投じて技術基盤を構築した。だからこそ、会員の皆様には月250円から参加いただける。技術開発の負担を個人に求めない——これも「民主化」の一部である。

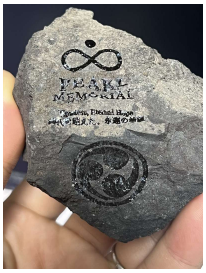
・素材検証：貝殻、木材、葉、金属、ガラス、プラスチック等への耐久性・加工性検証
・墓石調査：国内外の東洋・西洋墓石の現地調査（マウイ島、群馬県等）
・造形技術：3Dプリンタ、3Dペン、レジン、シリコンモールド等の造形・刻印技術検証
・サプライチェーン：日米両国での調達から返品までを含むハンズオン検証

すべて自己資金による実証である。これは「いつかできるかもしれない」理論ではなく、「既に動作する」技術

である。

【素材検証の実例】

貝殻



石

真鍮

木材

技術は既に存在する。あとは意志だけである。

第4章　存在証明の民主化——概念の定義

4-1.「存在証明」とは何か

存在証明（Proof of Existence）：「この人は存在した」ということを、時間を超えて証明できる記録。

具体的には：名前、生年月日・死亡日、出生地・死亡地、家族関係、人生の物語、写真・音声・映像、DNA情報。これらの情報が、永続的な媒体に記録され、将来の誰かがアクセスできる状態にあること。

4-2.「民主化」とは何か

民主化（Democratization）：特権階級だけが享受していたものを、すべての人に開放すること。

存在証明の文脈では：富裕層だけでなく貧困層も、有名人だけでなく無名の人も、子孫がいる人だけでなくいない人も、権力者だけでなく一般市民も——すべての人が、平等に、自分の存在を記録し、継承する権利を持つ。

4-3. SoulCarrierの位置づけ

【現在の活動】過去の「無名氏」を救う。個人の存在記録を収集・保存・継承する。寺院、宗教施設、関係団体と連携する。

【将来のビジョン】すべての人が自分の存在証明を持てるシステムの構築。永続的な記録媒体の民主的活用。「無名氏」という概念がなくなる世界の実現。

第5章　世界観の転換——Before と After

5-1. 現在の世界（Before）

【生きている間】「自分は何者か」を証明するために競争する。成功しなければ価値がないという焦り。「有名になりたい」欲求の根底に、忘れられる恐怖がある。

【死に対して】死は「終わり」であり「消滅」。子孫を残さなければ痕跡が消える不安。金がなければ墓も記録も残せない。

【社会】「偉人」を崇め「無名の人」を忘れる構造。歴史は勝者と権力者の物語。記憶の継承を担う存在に依存している。

5-2. 存在証明が民主化された世界（After）

【生まれた瞬間】誰もが「存在証明」を持つ権利を得る。国籍、家柄、財産に関係なく平等。

【生きている間】「存在は記録される」という安心感。競争ではなく、自分の物語を生きることに集中できる。他者の評価に依存しなくなる。

【死に対して】死は「終わり」ではなく「継承」。子孫がいなくても存在は残る。経済力に関係なく全員が記録される。

【社会】「偉人」と「普通の人」の区別が薄れる。歴史は全員の物語になる。特定の存在に依存せず、誰もが記憶を残せる。

5-3. 行動原理の根本的変化

【現在】「忘れられたくない」→「証明しなければ」→ 競争、焦燥、不安、比較

【民主化後】「存在は記録される」→「証明する必要がない」→「自分の物語を生きる」

> **「Before: 「他者のまなざし」の中で生きる」**

> **「After: 「自分の物語」の中で生きる」**

「忘れられないために」生きることから、「忘れられない前提で」生きることへ。この一点が変わるだけで、人間の在り方が根本的に変わる。

5-4. 愛の概念の転換

存在証明の民主化は、「愛」の概念にも根本的な変化をもたらす。

【現在の「愛」に潜む歪み】「忘れられたくない」という恐怖が、愛の形を歪めていることがある。相手に自分の存在証明を依存する。「見捨てられる恐怖」から操作的な振る舞いが生まれる。「自分を証明したい」欲求が、不倫や浮気の隠れた動機になることもある。

【存在が保証された後の「愛」】存在証明が民主化されると、愛の前提が変わる。相手に存在を証明してもらう必要がなくなる。「忘れられる恐怖」が燃料ではなくなる。純粋な共感、共有、尊重として愛が成り立つ。

【親子関係・教育の転換】「何者かになれ」という教育の押し付けも、親自身の「忘れられる恐怖」の投影であることが多い。子供を通じて自分の存在を延長しようとする。存在証明が民主化されれば、子供の存在自体がすでに価値を持つ。教育は「存在証明の手段」から「可能性の拡張」へと変わる。

夫婦間、親子間、世代間——あらゆる関係において、「存在の不安」に基づく歪みが緩和される。愛は、存在を確保する手段ではなく、存在を祝福する行為になる。

第6章　解決されうる社会課題

存在証明の民主化が実現すると、連鎖的に多くの社会課題が解決または緩和される可能性がある。

6-1. アイデンティティに関する課題

【現状】承認欲求の暴走、SNS依存、自己肯定感の欠如、他者との比較による苦しみ

【変化】「存在が記録される」安心感があれば、他者の承認に過度に依存する必要がなくなる。

6-2. 死生観に関する課題

【現状】死への過剰な恐怖、延命治療への執着、子孫を残せないことへの不安

【変化】「存在は残る」前提があれば、死の意味が変わる。死は「消滅」ではなく「継承」になる。

6-3. 経済格差に関する課題

【現状】墓石・葬儀の経済格差、「歴史に残る人」と「消える人」の階層

【変化】全員が平等に記録される社会では、経済力による記憶の格差がなくなる。

6-4. 孤独に関する課題

【現状】孤独死への恐怖、「誰にも看取られない」不安、無縁仏になる恐怖

【変化】一人で死んでも存在は消えない。孤独の意味が変わる。

6-5. 権力構造に関する課題

【現状】歴史の改竄、「勝者の記録」による支配、宗教・国家による記憶の独占

【変化】全員の記録が分散的に残れば、改竄が困難になる。特定の存在に記憶を委ねる必要がなくなり、より開かれた社会になる。

6-6. 競争社会に関する課題

【現状】「成功しなければ価値がない」という圧力、燃え尽き症候群、過労、うつ

【変化】「存在すること自体に価値がある」前提が浸透すれば、過度な競争が緩和される。

6-7. 組織・コミュニティに関する課題

【現状】社内政治——「自分の功績を認めさせたい」「存在感を示さなければ」。情報の囲い込み——「自分がいないと回らない」状態を作って存在証明。手柄の横取り——「自分の名前で記録されたい」。派閥争い——「自分たちの系譜を残したい」。

【変化】存在が保証されれば、組織は「存在証明の場」から「価値創造の場」に変わる。利権や派閥の多くは、「忘れられる恐怖」「記録される側にいたい」が燃料である。その燃料がなくなれば、純粋に目的に向かう組織が可能になる。

6-8. 根本にある構造——意識の底上げ

これらの課題に共通しているのは、「忘れられる恐怖」が隠れた燃料になっているという点である。承認欲求、死への恐怖、成功への執着、競争——すべての根底に「忘れられたくない」がある。

さらに深く見れば、恐怖、罪悪感、無気力、欲望、怒り、プライドといった意識状態も、この恐怖を燃料にしている。「記憶される価値がない」という恥、「十分なことをしていない」という罪悪感、「どうせ忘れられる」という無気力。

存在証明が民主化されると、この燃料が消える。個人の行動原理だけでなく、集合意識のベースラインが変わる可能性がある。

第7章　SoulCarrierの使命

7-1. 過去・現在・未来への責任

【過去への責任】すでに「無名氏」として忘れられかけている人々を救う。名前と物語を取り戻し、故郷への帰還または安住を届ける。

【現在への責任】今生きている人々に、「存在証明の民主化」という概念を伝える。この問題が存在すること自体を、社会に認識させる。

【未来への責任】これから生まれてくるすべての人が、平等に存在証明を持てる世界を作る。「無名氏」という概念がなくなる未来を実現する。

7-2. なぜ御遺骨から始めるのか

御遺骨は、物理的に「存在した証」である。それが故郷から離れ、忘れられかけている状態は、存在証明の問題の最も具体的な表れである。

抽象的な理念を語るだけでは、何も変わらない。目の前の一人を「無名氏」にしないこと。そこから始める。

御遺骨を届ける過程で、戸籍制度、寺院システム、国際的な手続きなど、記憶の構造に直接触れることができる。実践から得られる知見が、将来の活動の基盤になる。

7-3. 最初の一歩としてのMartin Case

SoulCarrierの第1号案件である「Martin Case」は、存在証明の民主化の最初の実践である。

【概要】依頼者：Martin（70代、日系アメリカ人、マウイ島在住）。対象者：岩下照子さん（Martinの母、約90歳で他界）。目的：母の遺灰を群馬県の親族のもとへ届ける。

【実施した調査】群馬県前橋市で寺院8箇所を訪問、5000基以上の墓石を目視確認、外国籍者による戸籍請求の手法を確立、現在も調査継続中（2026年完遂予定）。

このケースが成功すれば、岩下照子さんは「無名氏」にならない。彼女の名前と物語は、記録として残る。これが、存在証明の民主化の最初の一歩である。

第8章　参加への呼びかけ

8-1. なぜあなたの参加が必要なのか

存在証明の民主化は、一人や一団体で成し遂げられることではない。これは人類の構造を変える挑戦である。しかし、すべての変革は、最初の一人から始まる。

あなたが参加することで：Martin Caseのような具体的な案件を支援できる。「存在証明の民主化」という概念を広めることができる。将来のシステム構築に貢献できる。自分自身のルーツや存在について考える機会を得られる。

8-2. 参加への心理的障壁を超える

正直に言えば、「存在証明の民主化」を支持することには、心理的な障壁がある。

なぜ不安を感じるのか

既存の権力構造に疑問を呈することになる。「伝統」に逆らうように見える。周囲から「過激」と思われるかもしれない。所属するコミュニティとの関係が気になる。

しかし考えてみてほしい

「すべての人が記憶される権利を持つ」——これは本当に過激な主張だろうか。「無名氏を減らしたい」——これは誰かを傷つける主張だろうか。私たちが言っているのは、ごく当たり前のことである。

なぜこの不安を超える価値があるのか

あなた自身も、いつか「無名氏」になる可能性がある。この問題を放置すれば、構造は永遠に変わらない。最初に声を上げる人がいなければ、何も始まらない。

SoulCarrierへの参加は、既存の宗教や制度を「否定」することではない。私たちは寺院や宗教施設と連携して活動している。伝統を壊すのではなく、伝統が届かなかった人々に光を当てるのである。

不安を感じることは自然である。しかし、その不安の正体を見つめれば、それは「構造的に植え付けられた沈黙」であることに気づくだろう。その沈黙を破る最初の一歩を、あなたが踏み出してほしい。

声を上げられる立場の人へ

もしあなたが影響力を持つ立場にいるなら——メディア関係者、宗教者、学者、政治家、インフルエンサー——あなたにも参加の道がある。自分の利益のために沈黙する必要はない。「無名氏」の側に立つ代弁者になれる。あなたの声は、臨界点への到達を加速させる。

どんな宗教宗派でも、どんな信条立場でも、「存在証明の民主化」に賛同できる。これは特定の思想に対立するものではない。むしろ、あらゆる思想の根底にある「人間の尊厳」を問うものである。あなたが持つ影響力を、「無名氏」のために使ってほしい。

公に声を上げられなくても

立場上、公に声を上げることが難しい人もいるだろう。それでも、会員として静かに支援できる。個人として協力できる。専門知識や人脈を裏方として提供できる。

むしろ、影響力がある人ほど、この問題に対する罪悪感を感じているかもしれない。自分が「記憶される側」にいることへの後ろめたさ。その構造から利益を得ていることへの違和感。SoulCarrierへの参加は、その罪悪感を昇華する道でもある。公に宣言する必要はない。ただ、「無名氏」を一人でも減らすために、できることをする。それだけで十分である。

誰かに伝えるときの葛藤

この活動を誰かに紹介したいと思っても、躊躇することがあるかもしれない。「押し付けがましく思われないか」「宗教の勧誘みたいに見えないか」——しかし、考えてみてほしい。あなたが伝えようとしているのは、「あなたの存在も、あなたの大切な人の存在も、忘れられずに残る世界を作りたい」というメッセージである。これは相手を傷つける言葉だろうか。むしろ、相手のことを想っているからこそ伝えられる言葉ではないか。

「無名氏」の問題は、すべての人に関わる。あなたも、相手も、その家族も、いつか「忘れられる側」になる可能性がある。だからこそ、この問題を共有することは、押し付けではなく、共感の呼びかけである。「こういう活動があるんだけど、どう思う？」——そう聞くだけでいい。相手がどう受け取るかは、相手に委ねればいい。ただ、知る機会を提供すること自体に価値がある。あなたが声をかけなければ、相手はこの問題の存在すら知らないままかもしれない。

8-3. 会員になるということ

SoulCarrierの会員になることは、単なる寄付ではない。それは、「記憶される権利は平等であるべきだ」という宣言である。「無名氏」を一人でも減らすために、私は行動する——その意志の表明である。

8-4. 具体的な参加方法

- 正会員（年会費三千円）：活動に参加する個人。総会での議決権を持つ。
- 終身会員（一括九万円）：永続的に活動を支援する。一度の参加で、継続的に貢献できる。
- 賛助会員（一口一万五千円）：活動を支援する個人または団体。複数口での参加も可能。

【会費設計の意図】正会員の年三千円は月二百五十円——コーヒー1杯分で「存在証明の民主化」に参加できる。終身会員の九万円は正会員三十年分。これは「三十年後もこの活動を続ける」という私たちの決意であり、あなたと一生涯つながり続けるという約束である。

8-5. 宗教者の皆様へ——共に歩む仲間として

SoulCarrierは、宗教を批判する団体ではありません。むしろ、長い歴史の中で魂の救済と記憶の継承を担ってきた皆様を、最も重要なパートナーと考えています。

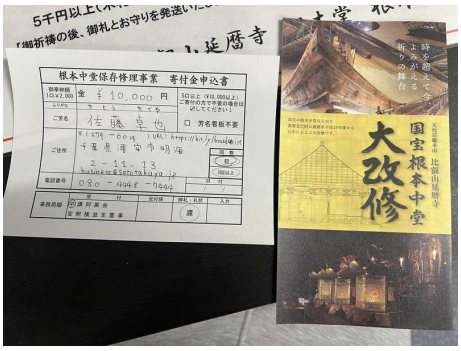
寺院・神社・教会は、何世紀にもわたり人々の記憶を守り継いできた。しかし技術的・経済的制約により、すべ

ての人を記録することは不可能だった。私たちは、既存の宗教システムを「補完」する存在でありたいと考えています。

【ご協力のお願い】無縁となった御遺骨の情報提供、帰還先の寺院・墓地としての受け入れ、「存在証明の民主化」という理念への賛同と発信。共に「無名氏」を一人でも減らす旅を歩んでいただければ幸いです。

【実際の連携】代表は既に、伊勢神宮への御造営資金や比叡山延暦寺・国宝根本中堂の大改修事業への寄付を通じて、宗教施設との連携を開始しています。

伊勢神宮 御造営資金 8,000円



比叡山延暦寺 10,000円

8-6. 研究者・学者の皆様へ——共に探求するパートナーとして

「存在証明の民主化」は、学術的にもまだ十分に探求されていない領域です。私たちは、研究者の皆様と共にこの概念を深めていきたいと考えています。

【関連する学術領域】死生学・タナトロジー、記憶研究・メモリースタディーズ、デジタルヒューマニティーズ、移民研究、宗教学・宗教社会学、哲学・倫理学

【私たちからの提案】フィールドワークへの協力、共同研究の可能性、「存在証明の民主化」概念の学術的精緻化。私たちは「正解」を持っていません。共に探求していきたいと考えています。

8-7. 影響力をお持ちの皆様へ——あなたの声が届く人がいる

メディア関係者、政治家、経営者、インフルエンサーの皆様へ。あなたの声は、多くの人に届きます。その力を、「無名氏」のために使っていただけないでしょうか。

【あなたにできること】この問題の存在を広める、SoulCarrierの活動を紹介する、政策提言や社会貢献活動としての連携。あなたが影響力を持っているのは、何かの才能や努力の結果です。その力を使って「無名氏」の問題を広めることは、偽善ではありません。

【匿名での支援も歓迎】匿名での寄付・会員登録が可能。裏方としての協力も歓迎。公表を前提としない形での連携も可能です。

8-8. 終活を考える皆様へ——自分の存在を残すということ

「自分が死んだ後、誰が覚えていてくれるだろうか」——特に、子どもがいない方、配偶者に先立たれた方、親族との関係が疎遠な方、独身で生きてこられた方。この問いは切実です。

【SoulCarrierからの提案】あなたの存在は、必ず残ります。私たちがそれを約束します。既存の墓・寺院との関係はそのままに、補完的な「保険」として考えてください。存在記録の作成支援、御遺骨の行き先の事前相談も可能です。

【終活としてのSoulCarrier】正会員（年三千円）として存在記録のサポートを受ける。終身会員（九万円）として永続的な支援関係を築く。あなたの存在は消えません。私たちがその証人になります。

8-9. 若い世代の皆様へ——今すぐできること

「死」や「墓」の話は、まだ遠い将来のことに感じるかもしれません。しかし、SNSの「いいね」や「フォロワー数」に一喜一憂していませんか？「何者かにならなければ」というプレッシャーを感じていませんか？これらの感情の根底には、「忘れられる恐怖」があります。

【今すぐできること】①祖父母・高齢の親族の話を聞き、記録する ②この問題を友人と話す、SNSでシェアする ③自分の存在を記録し始める（日記、写真、動画など） ④SoulCarrierに参加する

あなたの存在には、すでに価値があります。何かを成し遂げなくても、有名にならなくても、あなたは「唯一無二の存在」です。その当たり前のことが、社会の前提になる世界を一緒に作りませんか。

おわりに

私たちは、人類史上初めて、すべての人の存在を永続的に記録できる技術を手にしている。しかし、その技術は、まだ「存在証明の民主化」のためには使われていない。

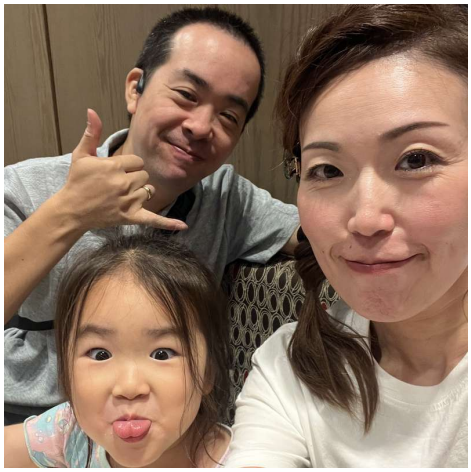
技術は存在する。足りないのは、意志である。

SoulCarrierは、その意志を持った最初の団体である。

「無名氏」を一人でも減らすために。すべての人が、自分の存在を記録し、継承できる世界のために。

この文書は、広島の被爆建物から執筆している。1945年8月6日の原爆を生き延び、80年以上経った今も存在を証明し続ける建物。Pearlはマウイ島で平和の願いと共に時を刻み、この文書は広島から発信される。存在証明の民主化は、平和への願いでもある。

「存在を記録し継承する——それは特権ではなく、すべての人の権利である。」



代表・佐藤卓也と家族

SoulCarrier（ソウルキャリア）
令和8年（2026年）1月15日
広島・旧広島中央電話局西分局にて執筆
（被爆建物——原爆を生き延び、今も存在を証明し続ける場所から）

【本資料について】SoulCarrier共鳴の会 入会案内の補足資料

代表：佐藤卓也
本社：〒279-0014 千葉県浦安市明海2-11-13
Email：business@satotakuya.jp
Tel：080-4448-7444
Web：bit.ly/boundaristjp